

赤塚城跡（板橋区）

前方の丘の上が、下図で堀切と表示した辺りで、赤塚城跡の二ノ郭の南側になる

[video](#)



それでは前方の丘に登り、二ノ郭～三ノ郭～一ノ郭と進んでみよう！/東側・北側(図の上)・西側は高低差のある堀(一部、水堀)で守り、南側は台地続きのため、堀切を入れていたと想定しましょう/なお、乗蓮寺境内は「赤塚城二の丸跡」とされていますが、ここでは出郭(出丸)と想定します



ここから左手に登って行くが、この坂は堀切に続く当時の谷であったように見える



坂の途中には、薬師堂(正面前方)が鎮座していた



道路の右手が赤塚城址広場の入口/この道路が当時は堀切となっていた部分の一部と想定される



ここが赤塚城址広場の入口/前方は梅林となっており、二ノ郭のエリア

 video



「城址の梅林」の説明板が立っている

 video



 子供たちが楽しみにしています。
梅の実には、手をふれないで下さい。

城址の梅林

梅は春を告げる花です。

ここ城址の梅林は梅畑であったものを農家から譲りうけ、平成七年六月から公園地として皆さんに親しんでいただいております。

白加賀（シラカカ） バラ科 サクラ属

花期は二月下旬～三月上旬

中国が原産の梅は花を見るだけでなく果実も採れる実利の植物でもあります。

毎年、公園管理所では梅の実を地元の養護学校の生徒さんたちに摘んでもらいその一部を近隣の福祉施設にもさしあげたいと考えています。

毎年、子供達が楽しみにしていますので梅の実には手を触れないよう、皆様のご協力をお願いいたします。

梅一輪一輪ほどのあたたかさ

嵐雪

平成十一年五月

都立赤塚公園管理所

これは二ノ郭の東側城塁の天端/こうして見ると土塁と堀が巡っていたような感じにも見える

[video](#)



こちらは二ノ郭の西側で、正面の散策路が左手の三ノ郭との間の堀跡なのかもしれない

 video



こちらが左手の三ノ郭のエリア



二ノ郭(右手)と三ノ郭(左手)との間の堀跡と思われる散策路を進んでみよう

[video](#)



両サイドが切岸ということか・・・

[video](#)



さて、このエリアが梅林で二ノ郭

[video](#)



少し進んで、二ノ郭から一ノ郭方向を見たところ/手前に一寸したマウンドがある

 video



その低いマウンドを左手から見たところ/右手がニノ郭、左手は一ノ郭

 video



同じく、右手から見たところ/左手の二ノ郭と右手の一ノ郭との間に、何らかの区切り(部土塁や堀切)があったものが改変されたのか？ [video](#)



そこで、左手の二ノ郭方向を見たところ

[video](#)



同じく、右手の一ノ郭方向を見たところ

 video



一ノ郭に標柱と説明板が立っていた



「板橋区史跡 赤塚城本丸跡」と刻まれた標柱



扇谷上杉氏の家宰であった太田道灌の助力により、下総国の守護千葉氏の末裔である千葉実胤は石浜城に、弟の自胤は赤塚城に入って武蔵千葉氏として活躍したと伝わる

武蔵千葉氏と赤塚城跡

下総国の守護千葉氏は、古河公方足利成氏あしかがしげさとしと関東管領上杉家とが争った享徳の大乱に巻き込まれ、一族で骨肉相食む争いを繰り広げました。康正二年（一四五六）成氏方の軍勢に攻められた千葉実胤・自胤兄弟これたねは、上杉家の助けをうけ、市川城を逃れて赤塚城と石浜城（現台東区）へ入城しました。

寛正四年（一四六八）に兄の跡を継いだ自胤は、太田道灌に従って各地を転戦、現在の和光市や大宮市、足立区内に所領を獲得するなど、武蔵千葉氏の基盤を築きました。

その後、武蔵千葉氏は、南北朝以来の領主であった京都鹿王院さくおういんの支配を排除するなど赤塚の支配の強化に努め、北条氏が武蔵国へ進出してくるとこれに従い、豊臣秀吉に滅ぼされる天正十八年（一五九〇）まで勢力をふるいました。

城は荒川低地に面し、東と西に大きく入り込んだ谷に挟まれた台地上にあります。その縄張りなわばりは、地形の観察等から都立公園の広場の部分が一の郭とりで、梅林の部分が二の郭、そしてその西側が三の郭とする見解もあります。正確はことはまだ明らかになっていません。

平成十三年三月

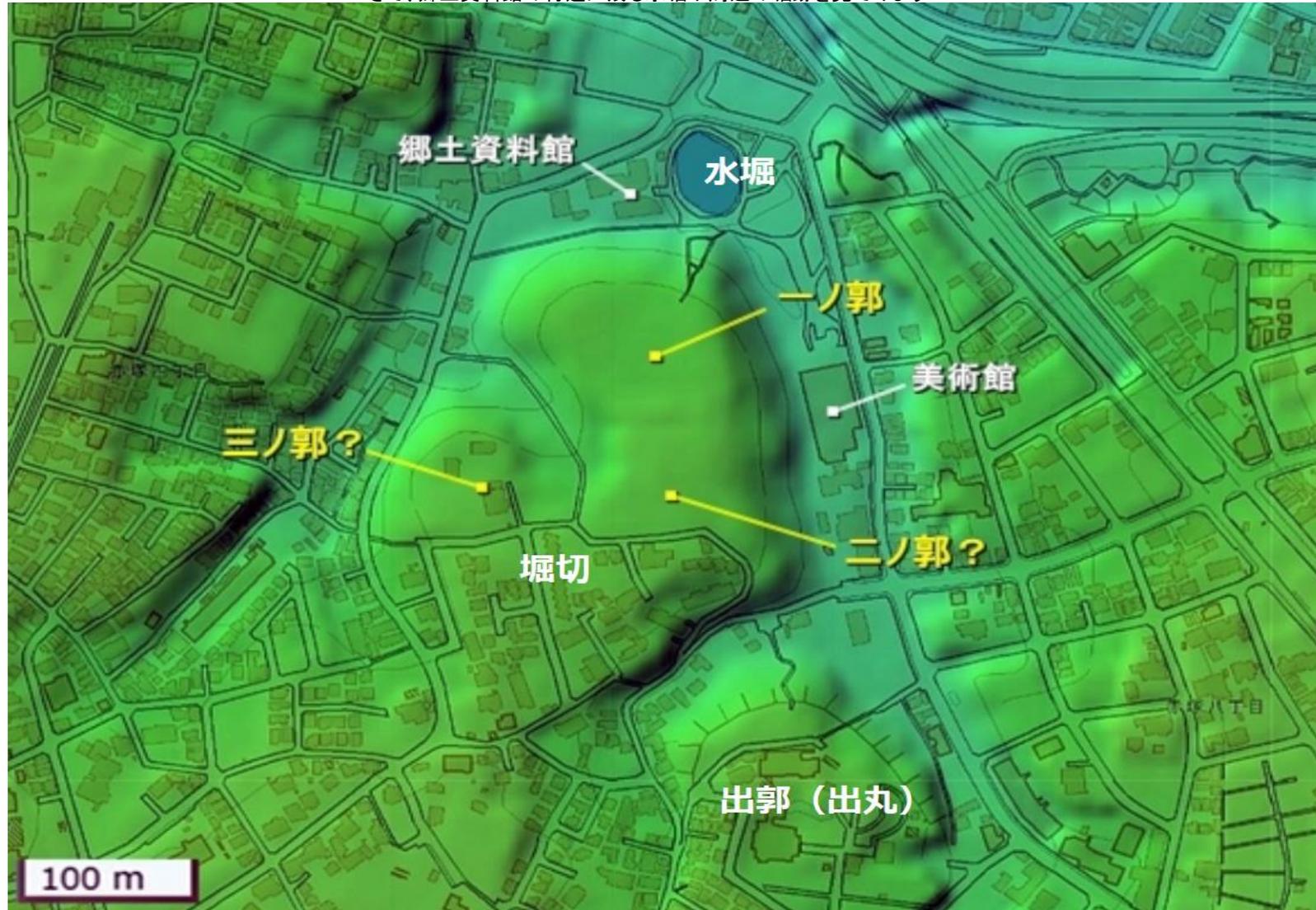
板橋区教育委員会

ここがーノ郭(本丸)

 video



さて、郷土資料館の付近に残る水堀や周辺の堀跡を見てみよう



この辺りは外堀であったようで、正面が水堀（現在はここだけが溜池として残っており、釣り堀のようにになっている）

[video](#)



水堀の向こうに郷土資料館が見える

 video



郷土資料館の左脇に進むと、説明板が立っていた/右手が郷土資料館、左手は赤塚城の城壘



赤塚城跡と徳丸ヶ原

赤塚城跡は、区立赤塚溜池公園の南の台地上に位置する室町時代の城跡です。現在大分が都立公園となっており、城山、お林山などとも呼ばれています。

ここは、康正二年（一四五六）に下総国市川を逃れた千葉自胤が入城したと伝えられ、現在でも空堀や土塁の跡を見ることが出来ます。北、東、西の台地の三方は、自然の谷で区画され、北側の溜池は、それらの谷のしみだし水をたたえています。

城跡の北側に開ける高島平は、江戸時代、徳丸ヶ原とよばれた原野でした。ここで天保十二年（一八四一）、長崎町年寄で西洋砲術家の高島秋帆が、江戸幕府から許可を得て洋式の砲術訓練を行い、「高島平」の地名の由来となりました。明治時代以降は開墾されて一面の水田地帯となり、「徳丸田んぼ」と呼ばれました。昭和四〇年代になると高島平団地の開発が始まり、景観は大きく変わりましたが、区立徳丸ヶ原公園に残る「徳丸原遺跡碑」（区登録有形文化財）が、高島平の歴史を伝えています。

令和二年十二月

板橋区教育委員会

そこに城壘を登って行く階段がある

 video



階段を登り切ると、そこがノ郭

 video



更に城壘に沿って進む

[video](#)



外堀の名残のような地形がある

 video



振り返って見たところ

 video



更にその先で城壘を左手に回り込むと、現在は道路になっているが、ここも外堀の跡のようだ

[video](#)



その辺りから城壘を登ってみると、一ノ郭への階段があった

 video



そこで、右手を見たところ/この散策路が二ノ郭と三ノ郭との間の堀跡に繋がっている

[video](#)

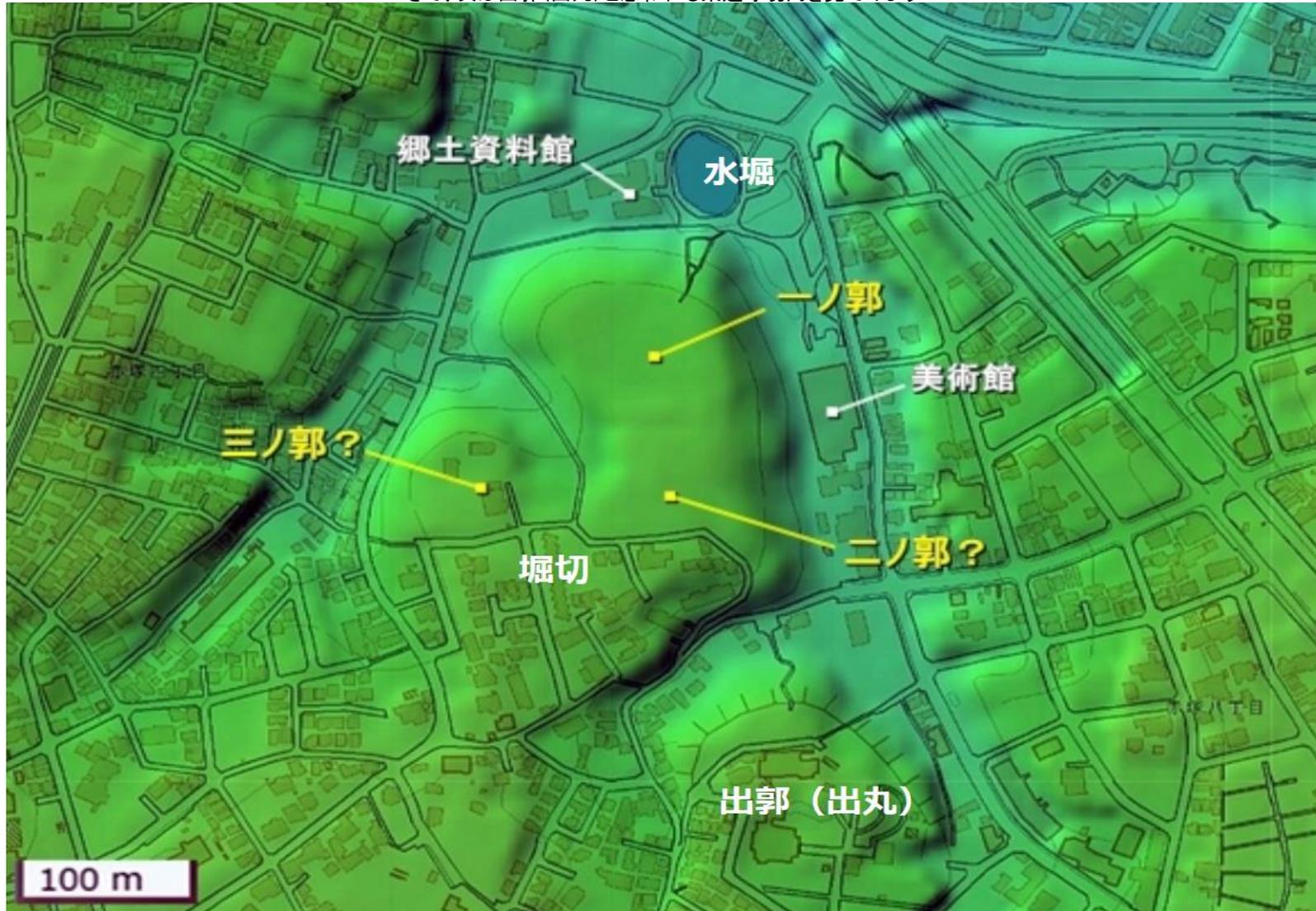


これは一ノ郭への階段を登って、振り返って見たところ

 video



さて、次は出郭(出丸)と思われる乗蓮寺境内を見てみよう



ここが乗蓮寺/東京大仏(俗に赤塚大仏)があることで知られる



乗蓮寺

御本尊は阿弥陀如来。浄土宗で赤塚山慶学院せきづかやまけいがくいんと称しています。応永年間（一三九四～一四二八）に了賢無的りょうけんむてきが山中村（現仲町）で人々に教化したことに始まり、後に板橋の中宿（現仲宿）に移転したと伝えられています。

天正十九年（一五九一）に徳川家康から十石の朱印地を与えられて以来、代々の將軍から朱印状を与えられました。また寛保三年（一七四三）に將軍吉宗が鷹狩りの際に雨宿りしたのが縁となり、それ以降將軍家の鷹狩りの小休所や御膳所となりました。

高速道路の建設にともなう国道十七号線の拡幅工事により、昭和四六年から七年の歳月をかけて現在の地に移転しましたが、その際に天災戦災等の無縁仏の供養や恒久平和を祈願して青銅製の東京大仏が建立されました。

境内には、板橋の領主板橋信濃守忠康の墓や天保飢饉供養塔、藤堂家ゆかりの石像があります。

平成十三年三月

板橋区教育委員会

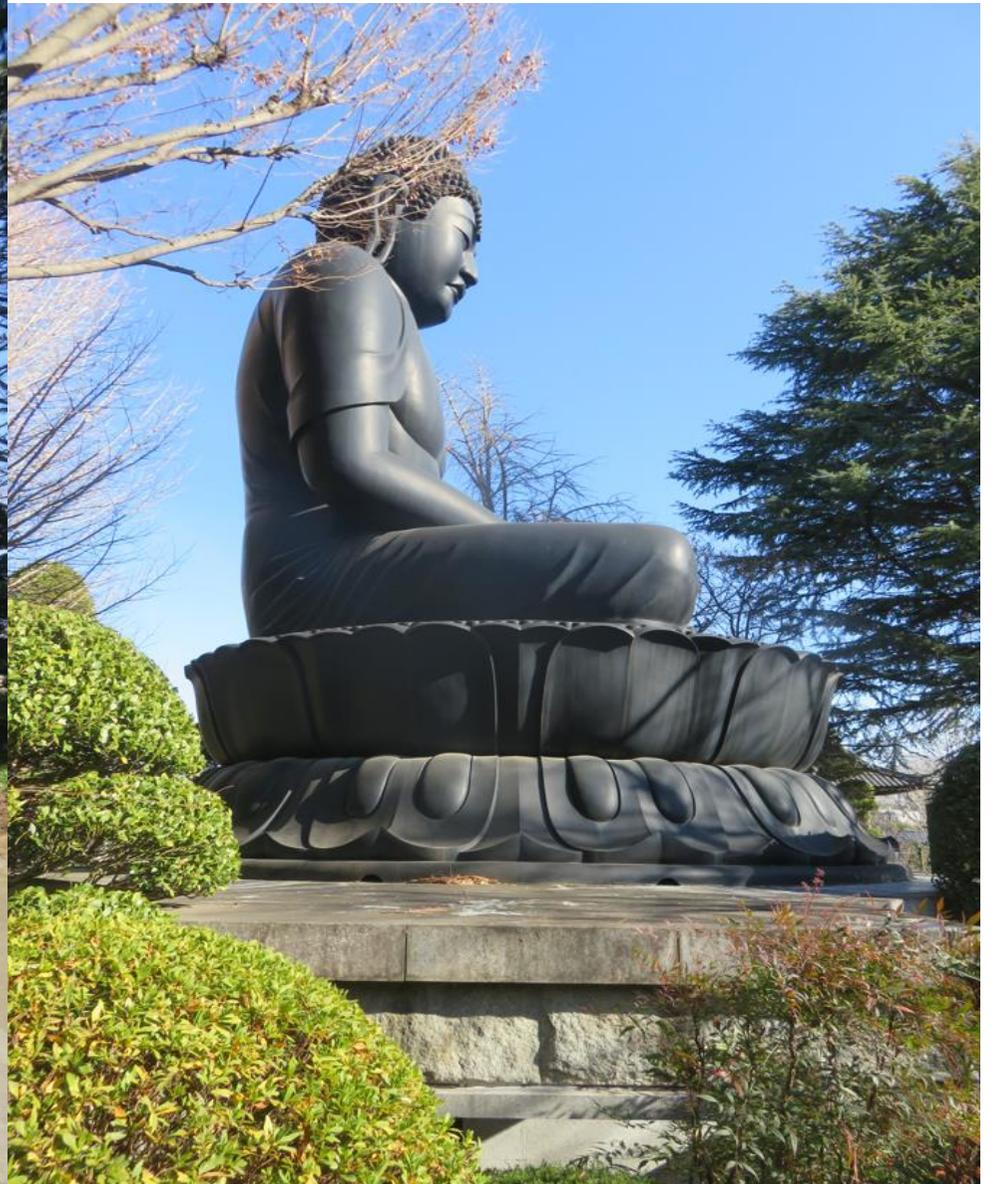
本堂

 video



東京大仏





東京大仏

この大仏さま（阿彌陀如来）は、当山住職二十三世
正譽隆道が、昭和四十九年八十八才にて発願、完成まで
約三年の歳月と延べ三千五百人の手によつて昭和五十二
年四月完成を了した。

千葉氏の居城であつたこ、赤塚城二の丸址に乘蓮寺を
建立するに際し、千葉氏一族、戦没者、そして有縁無縁
の霊をともし、世界の平和と万民救済の願いがこめら
れております。

奈良、鎌倉の大仏に次ぐ東京大仏です。
合掌して南無阿彌陀仏と十遍となえましょう。

材質 青銅（ブロンズ）製

重量 32トン

座高 8.2メートル（頭部3メートル）

蓮台 2.3メートル

基壇 地上2メートル、地下1メートル

境内には様々な石造物の文化財がある/これは「天保飢饉の供養塔」



天保飢饉の供養塔

天保の飢饉は、享保・天明の両飢饉と並び江戸時代三大飢饉の一つに数えられています。天保四年（一八三三）から同七年にかけて全国的な天候不順による凶作、疫病の流行によって大勢の餓死者や行路病死者（行き倒れ）が出ました。

幕府は、白米や銭を支給するとともに、同八年（一八三七）には、新宿・品川・千住・板橋の四宿に救助小屋を設けてその救済に努めましたが、亡くなる者はあとを絶ちませんでした。

この供養塔は、当時板橋宿の中宿にあった乗蓮寺の住職撮譽上人が、宿内の死者を寺内に埋葬し、その菩提を弔うために建立したものです。正面と左右の面には、江戸中期の浄土宗の高僧祐天上人筆の「南無阿弥陀佛」の名号が、また台座には同八年三月から十一月の間に亡くなった四二三人（男三三三人、女四九人、子供四一人）の戒名が刻まれています。

昭和六十一年度に板橋区の文化財（歴史資料）に登録されました。

平成十七年三月

板橋区教育委員会

「板橋信濃守忠康の墓(付石灯笼)」



板橋信濃守忠康墓（付石灯籠）

板橋氏は、平安末期より豊島郡を支配した武蔵豊島氏の一族であり、その末裔まつえいにあたる信濃守忠康は、『寛永諸家系図伝』によると、天正年間（十六世紀末）には、北条氏直に仕えていたといわれています。

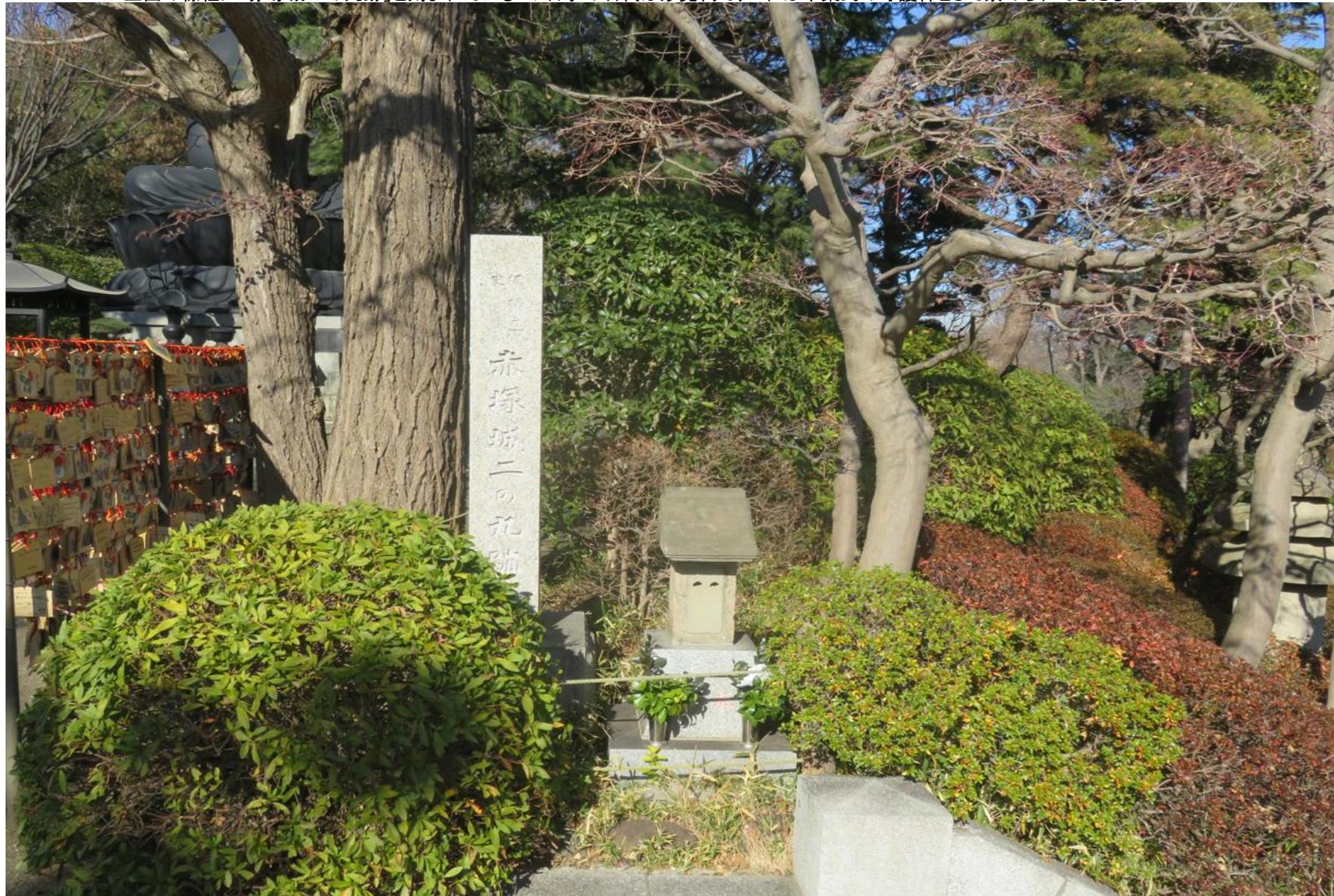
忠康の子である忠政は、北条氏滅亡後に徳川家康に仕え、子孫は旗本として幕末まで続きました。また、同じく忠康の子で、忠政の弟である蓮源社本誉利覚は、浄土宗の赤坂浄土寺の住職となっており、その関係から歴代の旗本板橋氏は浄土寺を菩提寺としています。

その中で、文禄二年（一五九三）十一月二十一日に亡くなった忠康だけは、本貫地である下板橋宿にあった乗蓮寺を菩提寺としています。

寛政四年（一七九二）に、先祖忠康の二百回忌が旗本板橋盛壽・盛種によって乗蓮寺で営まれ、その際に墓石が再建されています。なお、その顛末は、区文化財の「乗蓮寺文書」で確認できます。なお、墓石の脇にある石灯籠は万延元年（一八六〇）に十三代の板橋政道が奉納したものです。平成十年度に区登録有形文化財となりました。

平成二十年三月

正面の標柱に「赤塚城二の丸跡」と刻まれている！/右手の石祠は妙見祠で、これは千葉氏の守護神として崇められてきたもの



参道の道路側から見ると、乗蓮寺の境内は出郭(出丸)の体を成しているように思える

[video](#)



さて、こちらは乗蓮寺から程近い松月院



延徳4年(1492年)に赤塚城主の千葉自胤が、自身の菩提寺として寺領を寄進して中興したと伝えられている

松月院 萬吉山宝持寺 曹洞宗

延徳四年(一四九二)、千葉自胤これたねは当寺を菩提寺と定め、寺領を寄進し、自ら中興開基となりました。開山堂には開基の位牌をまつり、本堂西側墓地には自胤のほか比丘尼了雲の墓碑が建てられています。

天正十九年(一五九一)、徳川家康は四十石の朱印地を当寺に寄進し、朱印状を発給しました。以降、江戸時代を通じて、歴代将軍が発給した朱印状が、「徳川将軍朱印状」(板橋区指定有形文化財)として現存します。原則では将軍の代替りごとに返還するため、貴重な例です。天保十二年(一八四一)、長崎の町年寄で西洋砲術家でもあった高島秋帆が、幕命により、徳丸原で洋式砲術の調練を行いました。秋帆が当寺を本陣にした由緒から、遺品が伝わるほか、大正十一年(一九二二)に東京陸軍兵器長を務めた押上森蔵を発起人として建てられた「火技中興洋兵開祖高島秋帆紀功碑」(板橋区登録有形文化財)も境内に残ります。

また、赤塚六丁目四十番七号に所在する近世建築「大堂」(板橋区登録有形文化財)に伝わった国重要美術品「大堂 銅鐘」(板橋区登録有形文化財、板橋区郷土資料館寄託)や「大堂阿弥陀如来坐像」(大堂閻魔王坐像)(板橋区登録有形文化財)など、中世以来の由緒をもつ大堂に関わる貴重な文化財も現存しています。なお、大堂は大正十四年に都旧跡(当時は府)にも指定されています。

令和五年三月

板橋区教育委員会

山門

 video



中雀門

 video



その屋根瓦を見ると、千葉氏の家紋である「月星紋」が使われている



本堂

 video



本堂を左手に回り込むと、「伝 千葉一族の墓」がある

[video](#)



伝千葉一族の墓

松月院は、康正二年（一四五六）に下総国での戦いに敗れ、市川城から武蔵国の赤塚城・石浜城へと移った千葉一族の菩提寺です。また、この墓も一族を弔ったものと伝えられています。

当墓については、文化九年（一八一二）に齊藤幸孝が著した『赤塚紀行』に挿画入りで記されるなど、当時から広く知られていました。

向かって中央右側にあるものが千葉介自秀の墓とされ、松月院殿南洲玄參大禅定門の法名と、永正三年（一五〇六）六月二十三日の忌日が刻まれています。この墓碑については、すでに江戸時代の段階で後世に造立されたものと指摘されています。また、松月院ではこれを開基檀越である千葉自胤の墓碑としており、文化・文政期（十九世紀前半）に成稿した地誌、『新編武蔵風土記稿』でも墓銘にある自秀は自胤を誤記したものとされています。

左側には比丘尼了雲の宝篋印塔があります。『赤塚紀行』ではこれを自秀室の墓としていますが、時代的にはそれ以前の、元徳元年（一一三二）の年号が刻まれています。これは、区内最古の墓碑であり、境内の発掘調査成果と合わせて、武蔵千葉氏が当地に移る以前の段階で、当所に寺院が存在していたことを証明する貴重な資料となっています。

平成二十二年三月

板橋区教育委員会

中央右側の一番高い石塔(右側の献花がある石塔)が千葉自胤の墓とされる



さて、ここは乗蓮寺参道の道路際にあった「不動の滝」

[video](#)



このような湧水は、赤塚城の城兵の飲料水としても使われていたのかもしれない

不動の滝

不動の滝は、江戸時代に流行した富士詣・大山詣をはじめ、講と呼ばれる宗教的な集會に参加した人々によって、靈山登拝へ出発する際に心身を浄める水垢離みずじりの場として利用されてきました。滝の落ち口には寛政十一年（一七九九）に造立された石造不動尊像が祀られており、十八世紀末には水垢離場として利用されていたことがうかがえます。その後、幕末に赤塚地域で長野県の木曾御嶽山への靈山信仰が広がると、赤塚一山いっさん講が盛んに利用するようになりました。明治三十五年（一九〇二）には滝の周りの玉垣が整えられ、昭和八年（一九三三）には滝つぼの整備が行われるなど長年にわたって地元の人々に大切にされてきました。

かつて板橋区内の崖線では、いたるところに湧水があり、生活用水や信仰の場として利用されてきました。しかしながら、その多くは土地開発や宅地化によって消滅してしまいました。そのような中で不動の滝は、地域の講の人々によって継承されており、地域の信仰の場として利用されていた当時の姿をとどめています。

令和三年十二月

板橋区教育委員会

ここが板橋区立郷土資料館/ここに武蔵千葉氏に関する展示があった

[video](#)



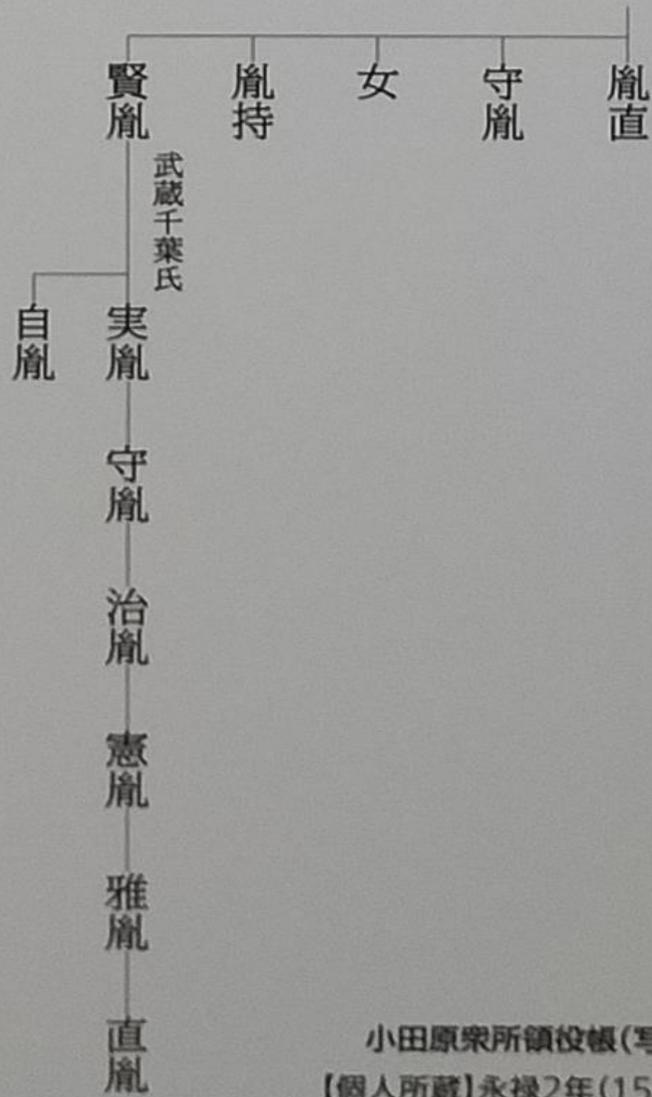
赤塚郷は元々は扇谷上杉氏の太田道灌によって滅ぼされた、秩父平氏の一族である豊島氏の所領であった

板橋区域の中世には^{いたばしごう あかつかごう しむらしょう}板橋郷・赤塚郷・志村庄の3つの郷庄があります。3つとも^{ごうしょう}平安時代末期から^{にんじ}仁治2年(1241)までは^{かいほつりょうしゆ}開発領主である^{としましりょう}豊島氏領です。仁治2年から約10年間は所領を^{ぼっしゅう むさし}没収した^{むさし}武蔵国主北条氏が領主となりますが、以後板橋郷・志村庄は豊島氏領に復帰します。赤塚郷は豊島氏に返還されず、^{とくそうりょう}得宗領(北条氏の^{そうけ}宗家得宗の所領)として^{かまくらばくふ}鎌倉幕府滅亡を迎えます。得宗領である赤塚郷は^{けんむせいけん}建武政権に没収され、^{かしかがただよし}足利直義(室町将軍足利尊氏弟)に与えられています(^{あしかがたかうじ どうただよししりょうもくろく}「足利尊氏・同直義所領目録」)。直義死後(^{ぶんな}文和元年-1352-)には、^{ほんこういん}本光院(直義正室)の^{いちごりょう}一期領となります(^{えいとく}永徳3年-1383-「^{じよしゆんきしんじょう}如春寄進状案」)。一期領とは本光院が生活していくために生存している間のみ与えられる所領のことです。本光院が亡くなると、^{めい}本光院の姪にあたり二代将軍^{よしあきら}義詮の正室である^{しぶかわこうし}渋川幸子(如春)が領主となります。如春は自らと^{ごしょう とむら}夫義詮の後生を弔ってもらうために^{てんりゅうじじゅうじ}天龍寺住持である^{しゆんおくみょうは}春屋妙葩に寄進します(^{こうりやく}康暦元年-1379-「如春寄進状案」)。ここでは^{いしなりむら}赤塚郷内石成村が除かれています。これは

^{おうあん}応安元年(1368)の^{へいいつき らん}平一揆の乱が影響しているものと思われます。その後、^{ろくおういん}永徳3年には、^{ろくおういん}妙葩の求めを受け入れ赤塚郷を改めて^{ろくおういん}京都の鹿王院に寄進しています。赤塚郷は^{えんかくち}京都からは遠隔地にあるため、しだいに鹿王院の支配が行き届かなくなり、15世紀半ばには^{かんとうかんれいやまのうちうえすぎし たよ}関東管領山内上杉氏を頼り遁れてきた^{ちばし}千葉氏(武蔵千葉氏)が入ってきます。鹿王院が領主であることに^か変わりはありませんので、^{おうりょう}千葉氏の行為は押領といって、犯罪行為となります。鹿王院は幕府を通じて^{せんごくじだい}千葉氏に返還を要求しますが、すでに^{せんごくじだい}戦国時代に突入している関東では力がものをいいます。^{さねたね}千葉氏はまず、^{さねたね}実胤が赤塚郷に入り、以後^{これたね}自胤(実胤弟)～^{もりたね}守胤(実胤子)～^{はるたね}治胤(守胤子)～^{のりたね}憲胤(治胤子)と^{てんしょう}継承されます。天正2年(1574)憲胤の後継者が^{せきやど}関宿合戦(千葉県野田市)で戦死すると、当時千葉氏が仕えた^{うじまさ}小田原北条氏の当主氏政が^{たまなわほうじょううじしげ}一門の玉縄北条氏繁の^{さんなん}三男を養子にいれ、^{なおたね}直胤と名乗らせ継承させます。そして、天正18年(1590)の小田原北条氏滅亡まで、^な武蔵千葉氏領として存在します。

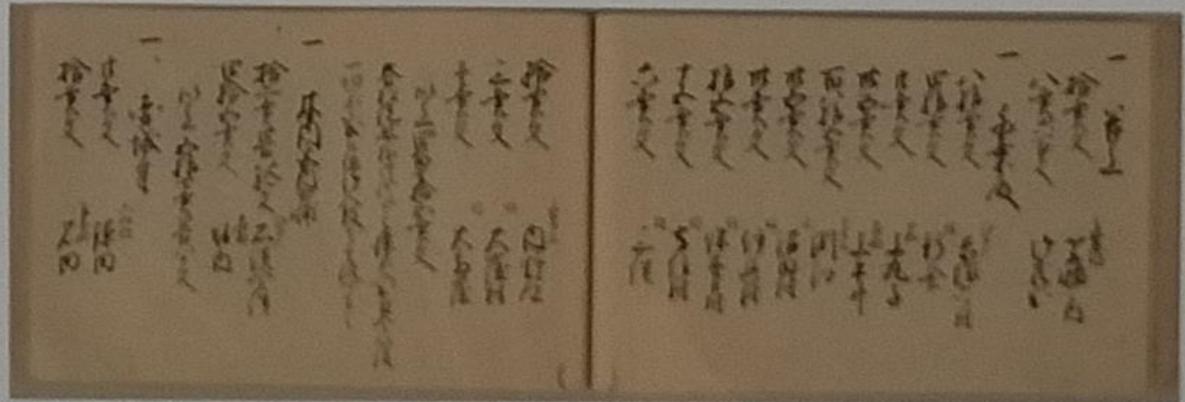
赤塚郷の領主変遷

武蔵千葉氏の系図



赤塚郷領主変遷

時代	できごと
平安時代	豊島氏が一帯を開発
鎌倉時代	仁治2年(1241)
	豊島氏宗家が没落 武蔵国守北条氏領となる
室町時代	元弘3年(1333)8月頃
	足利直義領となる
	14世紀半ば～
	本光院(直義正室)領となる
	渋川幸子(義詮正室)領となる
安土・桃山時代	康暦元年(1369)6月29日
	春屋妙葩(禅僧)領となる (妙葩の鹿王院領となる)
	永徳3年(1383)2月10日
	15世紀半ば～
安土・桃山時代	寛正4年(1463)12月28・29日
	鹿王院が赤塚郷の返還を要求
	文明10年(1478)5月27日
安土・桃山時代	延徳4年(1492)11月5日
	千葉玄参が宝持寺へ寺領を寄進
安土・桃山時代	天正18年(1590)
安土・桃山時代	小田原合戦 赤塚城廃城



小田原衆所領役帳(写本)
【個人所蔵】永禄2年(1559)

千葉玄参(自胤)寄進状



【複製】
【複製】
【複製】

「千葉重胤寄進状」(複製)
【北村照宗藏 千葉重胤ノ寄進状ノ複製】
1932年(1932)
千葉重胤が、赤塚郷の内倉御成田に千石の
田を寄進した。田名、産物、領主が記されている。

奉寄進
赤塚郷の内倉御成田
田一石
寄進人 千葉重胤
承和元年八月日
在持寺
成徳伏見

奉寄進
赤塚郷の内倉御成田
田一石
寄進人 千葉重胤
承和元年八月日
在持寺
成徳伏見

「多田隆六母寄進状」(複製)
【複製】
【複製】
【複製】

奉寄進
赤塚郷の内倉御成田
田一石
寄進人 千葉重胤
承和元年八月日
在持寺
成徳伏見

「千葉玄参寄進状」(複製)
【北村照宗藏 千葉玄参ノ寄進状ノ複製】
1492
千葉玄参(自胤)が、赤塚郷の内倉御成田に千石の
田を寄進した。田名、産物、領主が記されている。

千葉玄参寄進状

コ

コ

に

注

目

!

ほうじじ しょうげついん
宝持寺（現在の松月院か？）へあて、千葉玄参が土地を寄進する
内容の書状です。千葉玄参とは赤塚を治めた千葉自胤これたねを指すと考
えられます。千葉自胤・実胤兄弟さねたねは、千葉家本家でしたが、一族
の争いにより京都 鹿王院領きょうと ろくおういんりょうであった赤塚へやってきて、支配し
ていきました。このため、鹿王院から室町幕府むろまちばくふへ何度も千葉氏か
ら土地を取り戻す願いが出されます。やがて千葉氏はおおたどうかん
太田道灌と
ともに関東地方の平定に向けて活躍します。この寄進状は、千葉
氏が赤塚を支配していたことを示す証拠といえるでしょう。

現在は松月院の管理となっている赤塚大堂の梵鐘(重要美術品/歴応3年(1340年)の作で都内最古のもの)も展示されていた

[video](#)



